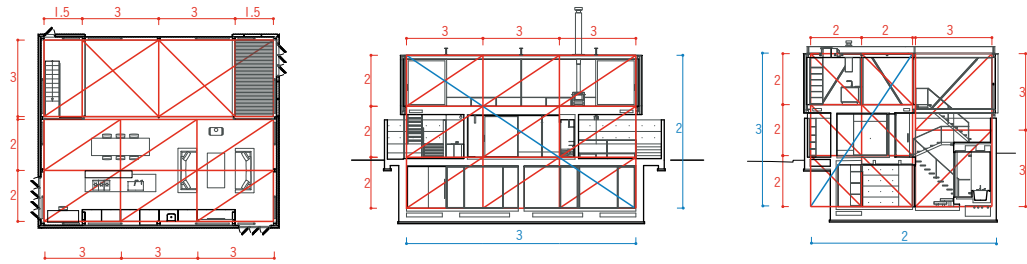


今さら何を、あえて言おう 理想・調和・プロポーション

矢板久明



左から「PATIO」平面図、長手断面図、短手断面図。赤ラインと文字は比率を示す。

正対して見ると古典、斜めから見ると近代
古代ギリシャから伏流水のように流れ続けているもの、それは真理を求め続ける心である。宇宙の構造が解き明かされ、最小単位の世界まで手の内にしたかに思える今、真理などということ

を建築界で聞くことはほとんどない。視覚情報が溢れ、消費され、本物と見まごうばかりの仮想空間がコンピュータ上に構築されていく中、これまで受け継がれてきた真理に近付かんとし、見えざる価値を導ぶ心はほとんどなくなってきているように思われる。
そんな中「PATIO」は、再び古典的世界に思いを馳せることとなり、そこに流れる思想の意味を改めて再認識する機会となった。それは建築家の米田明氏が「PATIO」に立ち寄ってくれた時のこと。彼は「正対して見れば古典、斜めから見れば近代の空間がある」という、大変興味深い感想を述べた。一見スタティックなフレームの中に、流動性の高い空間をつかったル・コルビュジェの建築がこれにあたるようだ。意味深長な言葉である。私もこれまで考えてきたことが、「PATIO」でひとつの成果として立ち現れてきており、目指す空間の一端が生まれていることを感じていた。彼の言葉はそんな私の頭の中をかけめぐり、いろいろな思考の過程を振り返るきっかけとなったのである。

理想、あこがれ、麗しきもの

学生の頃、コーリン・ロウの著作やロウの師であるR・ウィットコーワの著作などを心躍らせながら読んだ。過去の偉大な建築家たちがどのように建築を考えていたのか。そして、何を心の拠り所としていたのかを垣間見たような気がしたものである。

コーリン・ロウは『理想的ヴィラの数学』^[1]で、連続と続く西欧思想としての数的宇宙観を提示した。その著書でパラディオの「ヴィラ・マルコンテナ」とル・コルビュジェの「ヴィラ・ガルシェ」

が双方とも類似した比例関係を用いていることを指摘し、近代建築の旗手であるル・コルビュジェが、確実に西欧の哲学的伝統を引き継いだ精神的な古典主義者であったことを示した意義は大変大きかった。
もともとこの論は、R・ウィットコーワが『ヒューマニズム建築の源流』^[2]で、ルネサンスが音楽比と空間比を同一視する思想を根底にもつと指摘したことに端を発する。この『ヒューマニズム建築の源流』で、脈々と続く西欧の数的神秘主義の流れが明らかにされた。ルネサンスの思想は協和音なるものが単純な整数比によって決定されることを発見したピタゴラスの思想を源流とし、その後、プラトンの「現世は善なるアイデアの投影である」とする二元論的世界観のアイデア論へと引き継がれ、ローマ時代に入り「現世もアイデアも一者から〈流出〉した善き存在である」とする一元論的なプロティノス^[3]による新プラトン主義に変貌し、後に、この思想が15世紀にフィッチェノたちに受け継がれ、ルネサンスとして大きく花開いた。この『ヒューマニズム建築の源流』は、その後コーリン・ロウを通じてルイス・カーンにも直接手渡されたという^[4]。

古典とは、数的宇宙観に源流をもつ思想

『建築へ』^[5]の中でル・コルビュジェは「建築は優れた芸術であり、比例の取れた関係によってプラトンの偉大さ、数的秩序、調和の思考と知覚という状態に達する」と述べた。
ピタゴラスの「万物は数なり」と捉える数的宇宙観に端を発し、プラトンが『ティマイオス』^[6]で述べた「宇宙は幾何学的充実体である」とする哲学は、「宇宙はデミウルゴスの意思により現れ、意図せざるものはない」という確信に基づくものであった。その思想を受け、ル・コルビュジェは「精神的なるものは美しく、美しいものは幾何学的精神の直接の反映であることを固く信じて建築をとらえる」^[7]という一貫した態度であった。

彼にとって数的宇宙というアイデアの世界は、もはや単なる知識ではなく、ありありとそこにあるものとして捉えていたはずである。筋金入りの神秘主義者であったといつてよい。

建築は目を閉じて理解するもの

数的秩序を論じること、そこにあるのは精神である。現象世界で勝負する建築でも、それは変わらないはずだ。それはコーリン・ロウが「透明性」^[1]の中で、美学者G・ケベッシュの言葉を引用し「透明性とは、空間的に別のところにあるものを同時に認識すること」と述べている。この透明性も、昨今、目に見える世界だけで論じられることが多く、もはや精神性の欠如としかいえない状況である。ここで論じている数的比例を通しての建築の認識は正にこの透明性の獲得なのである。それでは、建築における数的宇宙の歴史を少し紐解いてみる。

パルテノン神殿 [図1・2] は6つの2:3の矩形からなり、正面は基壇下部からコーニスの高さの2倍の幅となっている。有名な黄金比は破風の頂部で成立している。ル・コルビュジェのロンシャンの教会 [図3] は自由奔放に見える形態にもかかわらず、単純な幾何学が基礎となっている。ル・コルビュジェ財団にある図面の平面にはふたつ正方形が描かれ、高さも平面の正方形の一辺の1/2を一辺とするふたつの正方形が示されており、空間のヴォリュームとして8つのキューブが置かれていることが分かる。ルイス・カーンの場合、私の研究によれば^[8]ここに挙げるイエール大学アートギャラリー [図4・5] 以降、ほぼすべての彼の建物に黄金比の近似である5:3と正方形が採用されており、サーバントスペースとサブスペースも、これらの矩形や正方形が重なり合った部分に現れてくる。ここで挙げた3例とも、ヴォリュームとして比例が用いられており、比例的関係を通じて建物を3次元の概念としてとらえていることが重要であると考える。

浮かび上がる数的秩序—PATIOの場合

「ルネサンスの建築家は、常に左右対称を理論上の必要条件と見なしていた」^[1]とコーリン・ロウは述べている。球を究極的な幾何学立体とするプラトンの宇宙観では、対称形を理想とすることは、より完全なかたちを希求する意識からも自然なことであったと思われる。

偉大な建物を言及した後で僭越であるが「PATIO」についても述べてみよう。建物長手方向での構造フレームは左右対称となっている。これは1階の開放性を高くするため、和室を囲む構造のみを置き、地下の寝室と書斎の間の柱を建物長手中央に置くという提案を、構造家の杉浦克治氏から受けたことに端を発する。やじろべえのように構造的バランスを取る、という重力を意識したごく自然な態度が、この建物に軸線を与え、シンメトリーが生まれた。建築がかくありたしと語り出したのである。これは自然の摂理を受け止めた結果であり、宇宙の理と呼応したように感じた。断面では各階とも同じ高さが与えられ、長手方向では9つの2:3の矩形で整えることが相応しく思われた。平面でも2:3の矩形が現れ、2階のリビングは6つの2:3の矩形で、その短手断面は2倍正方形である。このリビングの数的ヴォリュームはパルテノン神殿と同じものになっていた。なんとも不思議である。

「規制線の選択は靈感の決定的瞬間」とル・コルビュジェは述べている。私も設計が大詰めを迎え、全体の数的秩序が現れる時、不思議な感覚を覚える。そしていつも思う、「あっ、そうだったのか」と。

数的秩序を与えることは、自由さの獲得

プロポーションを与えること自体が、縛られるような印象を受ける人も多いかもしれない。しかしそれは全く逆であり、自由さを獲得し、空間がふくらみを得るときであり、建築が意志を獲得したと思う瞬間である。比例で調整するのはあくまで秩序を発見することで、最初は無意識をしない。

建主の要望に耳を傾け、さまざまな条件に対して最善と思える答えを出していった後、最後にすがすがしい秩序との出会いが待っている。それまで頭を悩ましていた問題は美学へと昇華し、跡形もなく消え去っていく。後に残るのは目を閉じて心に残る秩序であり、それはいつまでも変わらない普遍的なるものである。

未来に向けて今思うこと

調和を目指すベクトルと、進歩、発展を目指すベクトルはクロスする。両立させることは難しい。視覚情報の氾濫する現在ではより新しいこと、革新的なことを求めるのは自然なことかもしれない。しかし、我々に深い感動を与えてきた建築を思い起こす時、それらをつくった人びとの精神と彼らの信じた世界へ、もう一度目を向ける時ではないだろうか。
アイデアに近付き、真理へと向かう扉のひとつが数的宇宙観であった。特にル・コルビュジェの一途さは特筆に値するものであり、また作品すべてに黄金比を使い続けたカーンの強靱な精神は驚異ですらある。彼らは調和と発展というふたつのベクトルを止揚したのだ。それを実現させたのは、人類の真なる幸福を願う心であり、真摯にアイデアを見つめ続ける謙虚さであったように思う。未来に向けて求められるのは、まさにこの姿勢に違いない。

参考・引用文献

- [1] コーリン・ロウ著 伊東豊雄・松永安光訳「マニエリスムと近代建築」1947年・1981年 彰国社
- [2] R・ウィットコーワ著 中森義宗訳「ヒューマニズム建築の源流」1949年・1971年 彰国社
- [3] プロティノス著『エネアデス』（プロティノス全集）A.D.3世紀・1987年 中央公論社
- [4] D・G・デ・ロング著 東京大学香山研究室監訳「第2章リアライゼーションへと開かれる心」『ルイス・カーン 建築の世界』1992年 デルファイ研究所
- [5] ル・コルビュジェ著 樋口清訳「建築へ」1923年・2003年 中央公論美術出版
- [6] プラトン著 種山恭子訳「ティマイオス」（プラトン全集 第12巻）B.C.4世紀、1975年 岩波書店
- [7] 広部達也著「凝視するデミウルゴス」1985年 建築学大系6 彰国社
- [8] 矢板久明著 東京大学修士論文「空間算法試論」1982年
- [9] 加藤道夫著『ル・コルビュジェ』2011年 丸善



左：2階Floating PATIOからリビング方向を見る。中心の梁からシンメトリーに空間が展開する。
右：2階階段室から見る。中庭と居室の階層を超えた連続性を生み出す。

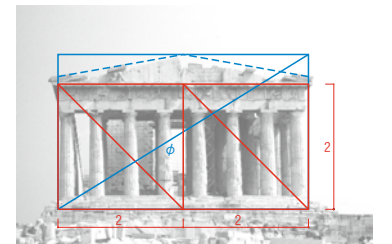


図1：パルテノン神殿 断面図

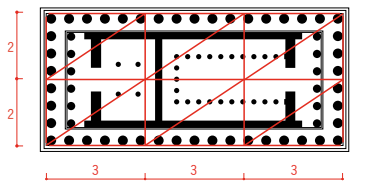


図2：パルテノン神殿 平面図

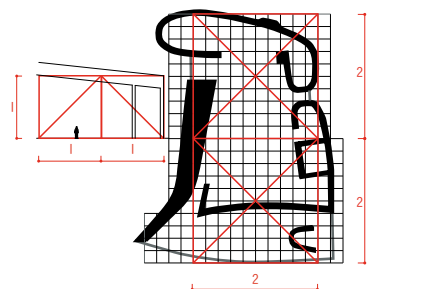


図3：ロンシャンの教会 断面図・平面図

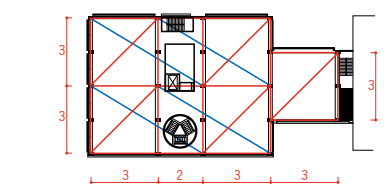


図4：イエール大学アートギャラリー 平面図

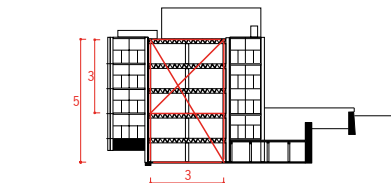


図5：イエール大学アートギャラリー 断面図

図版

*図面はすべて筆者作図、図2以外は筆者分析
[図1] 筆者撮影
[図2] Henri Stierlin「GREECE from Mycenae to the Parthenon」p.191を参考
[図3] ル・コルビュジェ財団FCL7455を参考
[図4・5] ETH「LOUIS.I.KAHN complete work 1935-74」p.66を参考